

---

# 『ノスフェラトゥの鼓動』

想隆 泰気

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『ノスフェラトゥの鼓動』

### 【Nコード】

N1285P

### 【作者名】

想隆 泰気

### 【あらすじ】

それは、ノスフェラトゥと呼ばれていた。絶食しようと服毒しようとして死ぬことはない、ヒトを超越したモノ。それがどんなモノであるのか。その娘には分からなかった

## （前書き）

・ 思いつきショートショートですがよろしければ。  
・ 現在構想段階にある『リヴオニア』クールラントサーガ（仮）  
の一節を短編化した作品になります。

それは、ノスフェラトゥと呼ばれていた。

絶食しようと服毒しようと、けて死ぬことはない、ヒトを超越した生き物。……いや、生きていると言っていいのかすら定かではない、人外のモノだ。

それを真に何と呼べばいいのか　その娘には分からなかった。元より籠の中で育てられたような娘だ。この世にそんな得体の知れないモノが存在すること自体、彼女は知らなかった。

……それでも、違和感は感じていた。目覚めた時から、ずっと。あの男の腕の中で目覚めた時から、ずっと。

何百年と言う長い眠りから覚めたような気分だった。まるで生まれ変わったような、そんな感覚。あの時は分からなかったけれど……それが、合図だったのだ。

脈打つことのない自らの胸に手を当てて、娘は思う。ああ、やはり、男の言葉は嘘ではない　自分は、ヒトでないモノになったのだ……と。

その娘は、北東欧はリヴォニアの、とある地方を治める小領主の娘として生を受けた。

領地と言っても、小さな集落とそれに付随する僅かばかりの農地があるだけの、小さなもの。けれど、娘は両親を初め、心優しい村民達に愛され、何不自由なく育てられた。

苦労や悲しみを知らぬが故の我が侘さはあれ、善良で美しい少女。されど、閉ざされた世界のことしか知らない籠の鳥。……それが彼女だった。

だから、領地が何者かに因って襲撃された時も、いったい何が起

きたのか、何が起きているのか、彼女には分からなかった。

ふと目覚めた時、最初に彼女の眼に映ったのは、黒い甲冑と黒い外套に身を包んだ騎士の姿だった。娘の体は、その騎士の腕の中にあつた。

全身に不思議な感覚を感じながら、貴方はどちらの騎士ですか、と娘は問うた。家臣の中に、このような騎士を見たことはなかったから。

私は騎士ではない、と騎士　黒衣の男は言った。聞けば彼は、西方をバルト海に面する公国、クールラントに属する傭兵で、一部隊の長でもあるのだと言う。

無骨な傭兵にしては、不思議な威厳や気品を感じさせる男だと娘は思った。尋ねようとしたが、それを咎めるように、何が起きたかを覚えているか、と男は言った。

覚えてはいなかった。何かが起きていたのは分かる。村民や家の者が、慌ただしく騒いでいたのは覚えていた。けれど、部屋からけして出ないように言われた娘は、外で何が起きていたのなんて分からなかった。

この村は敵軍の襲撃を受けたのだ、と男は言った。たまたま近くに立ち寄っていたため、自身の隊を率いて救援に駆けつけたのだが、時既に遅かった、と。

昨今、リヴォニアが戦乱にあることは知っていた。けれど、こんな片田舎の小村などが顧みられることではなく、娘はずっと、不思議な平穏の中にあつた。

男の言葉が俄には信じられず、娘は問い詰めようとした。……だが、まるで自らの体ではないかのように全身の自由が利かなかった。戸惑う彼女に、少し眠るといい、と男は言って、娘の髪を優しく撫でた。

まるで何かの術にでもかかったように、娘の意識はそこで途切れた。

「何故わたしを……こんなカラダにしたのですか……？」

震える声で、娘は問うた。

相対するのは、黒衣の男。……あの時、自らを目覚めさせた男。

「……こんな、とはどういうことだ」

低く、感情を覗かせない声で返す男。

「白々しいことを言わないでっ！」

娘は激昂した。同時に、手にしていた短剣を抜くと、躊躇うこともなく自らの胸に深々と突き刺した。

やがて引き抜かれる刃。胸に咲く赤い薔薇。身に纏う純白のドレスが、見る間に赤く染められていく。……けれど、娘は絶命することもなく、男を憎らしげに睨め付けた。

「……何故？ どうしてわたしは生きているの？ 心臓を突き刺したのに、こんなにも痛いのに、こんなにもっ 血が溢れているというのにつ……！」

慟哭するように叫び、しかし、すぐに脱力するように肩を落とした。

「……分かっているわ。わたしの心臓は疾うに役を為さなくなっている。……もう二度と、脈打つこともない。……見て」

言いながら、娘は自らのドレスを引き裂いた。倒錯的な美しさを感じさせる、赤く濡れた乳房がこぼれ落ちる。そこには、たった今付けられた、刃に因る深い傷が すでに、口を閉じかけていた。

「……もう、ほとんど傷が見えなくなってる。……痛みも……もうないわ。……これは何？ このカラダは何？ ……いいえ、分かつ

てる。……わたしは、醜い『死人<sup>しじふと</sup>』になっただわ」

諦観を覗かせる声で呟いた娘に、男は言った。

「……私には、お前が醜い死人などには見えぬ」

「貴方がどう思っかなんて関係ない！」

落ち着き払った男の声に、娘は再び激高した。

「わたしがっ……わたし自身がこんなカラダを気持ち悪いと思ってる！ こんなカラダにした貴方を憎いと思ってる！ 許せないって、思っているのっ……！」

籠の中で育てられた娘にとって、今の自分は到底理解できる存在ではなかった。無垢で潔癖な彼女にとって、それは何よりも耐え難い苦痛だったのだ。

娘の悲鳴を聞いて、男は思案するように瞳を閉じた。

「……死人、とはどう言ったモノだと思う」

ふいな問い。娘は言葉に窮した。

男は、静かに続けた。

「……死人とは、物言わぬ骸のことだ。何も考えぬ、何も感じぬ死者のことだ。何も為せぬ、愚者のこと。……何も生み出せぬ、虚ろなモノのことだ。私は、お前がそう言ったモノであるとは思わない」

「……ひとつ、聞かせて」

絞り出すように、娘は言った。

「……何故、わたしをこんなカラダにしたの……？」

しばし逡巡してから、男は語った。

あの日 男が娘を発見した時。娘は、既に虫の息であった。彼女を捕らえた者が極度のサディストだったのだろう。彼女は貞操を蹂躪されたばかりか、眼球は抉り出され、歯牙は尽く引き抜かれ、四肢の骨を粉々に碎かれ、全身の皮は剥がされていた。

血だまりに投げ出され、まともに口を利くことも出来ないそんな娘を、男は捨て置くことが出来なかった。外法であるとは知りながら、それでも救わずにはいられなかった。

……忘れていた記憶が蘇る。下卑た笑みを浮かべながら、自らを蹂躪する男達。泣き叫び、やめてと何度叫んでも、骨を砕く鎚を止めなかった男達。恐怖と嫌悪と絶望が一気に溢れて、娘は膝を突いた。

「……死なせてくれれば良かった。こんな記憶と醜いカラダを持つて生きるくらいなら、いつそ……」

「お前は、死人ではない」

唐突に、男は言った。

「死人は、何も感じない。何も生み出さない　だが、お前は今まで、本当にそんな死人であつたのか」

問われて、娘の脳裏に、男と出会ってから今日までの日々が思い返された。

あの日、全てを失った娘は、黒衣の男の庇護の下、彼を含め13人から成る、彼の小さな傭兵隊と生活を共にするようになった。男ばかりの無骨な集団だったが、中には同じ年頃の娘もいて、多少の不便はあれ、嫌悪などはなかった。

隊長である男の人柄故なのか、戦場の外にいる間、隊の傭兵達にはいつも穏やかな空気があった。中には紳士的な者もいれば乱暴な者もいたが、その誰もが、何の役にも立たない箱入り娘を、煙たがることもなく受け入れてくれた。

家族を失い、故郷を失い、失意の底にあつた娘にとって、それは何よりの助けになった。

だが、何よりも娘の心を勇気づけたのは、黒衣の男　つまり、眼の前のその男の温もりだった。男は口数が少なく、表情にも乏し



かったが、言葉の一つ一つは不思議な重みを持っていて、そのどれもが、言葉に出来ない暖かみに溢れていた。

娘はいつも男の側近くに仕え、いつしか、自ら甲斐甲斐しく彼の身の回りの世話をするようになった。娘には分からないことばかりで、それこそ毎日が失敗の連続であつたが……それを、かけがえのない幸福だと感じるようになっていた。

「……わたし……は」

激情と絶望で忘れていた感情に、娘は虚ろな呟きを漏らす。

男は娘の前に膝を折った。

「お前は虚ろな死人などではない。何かを想い、何かを生み出すことも出来るのだ。……しかし」

言いながら男は、短剣を握つたままにいる、娘の小さな手を取つた。

「私が浅慮であるが故に、お前に、私と同じ苦しみを与えてしまった。……私は、裁かれねばならぬのだろう」

娘の握つた短剣が、男の胸へと導かれた。

「え……なに……を……？」

混乱する頭では、いったい何が起きているのか分からなかった。

狼狽えたように手を引こうとする娘を、男は逃がさなかった。短剣の刃先が、黒衣に食い込んでいく。

「今のお前の中には、私と同じ血が流れている。だが、私が死ねば、お前の中の『血』も活動を停止する……お前の虚ろな生も、終えることが出来るだろう。私が憎いのならば、自らが醜いと思うのならば 私の胸を突け」

男の手に、力が籠もつた。娘の意志を無視して、短剣は男の肉に食い込んでいく。

何が起きているのか分からなかった。何を言われているのか分からなかった。辛うじて娘に分かつたのは 愛する者が、死のうと

していると言っただけ。

「っ いやあっ！」

悲鳴を上げて、娘は男の手を振り払った。振り払っただけじゃない。短剣を放り投げたそのままの勢いで、男の首元に腕を絡めた。そうして 男の言葉を咎めるように、口づけを交わした。

どれだけそうしていたか。やがて気を落ち着けると、娘は静かに言った。

「……やめて……わたしから、もう……大事なヒトを奪わないで……」

そう言っただけで瞳を濡らす娘に、男はそつと彼女の頬を撫でて言った。  
「……ヒトならざるモノに身をやつし、幾年月 私は、烏滸がましくも思ふのだ。たとえこの胸が脈打つことを忘れても、誰かの鼓動を感じることは出来る。……誰かの鼓動と、共にあることは出来るのではないかと……」

そう、まるで自身に言い聞かせるように言う男に、娘はもはや反論などしなかった。頬に触れる男の手の上に、己のそれをそつと重ねた。

「……わたしの中には、貴方の血が流れている。わたしは、貴方に生かされている 貴方の写し身……なのですね」

言つと、娘は不自然なくらいの穏やかさで、にこりと笑った。

「……ならば、わたしは貴方と共に歩みましょう 貴方と共にあることが、わたしの生の証明です」

そう言っただけで、もう迷いはなかった。

何故なら、娘はもう、ヒトの鼓動を感じていたから。その鼓動と共に歩むことが、自らの救いであると分かったから。

願わくは、貴方の鼓動に。

男の鼓動を感じながら、娘はそう、願っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1285p/>

---

『ノスフェラトゥの鼓動』

2010年11月25日05時40分発行